The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生殖技術の知識をめぐる文化社会学的研究 ： 研究者・医療者・当事者への質的調査から
Author(s)	竹田, 恵子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58488
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	竹　田　恵　子（たけだ　けいこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２４１６１　号
学位授与年月日	平成22年9月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**生殖技術の知識をめぐる文化社会学的研究―研究者・医療者・当事者への質的調査から―**
論文審査委員	（主査） 教　授　山中　浩司 （副査） 教　授　川端　　亮　　准教授　吉川　　徹

論　文　内　容　の　要　旨

〔背景〕生殖技術のヒトへの応用は，恩恵を生み出すと共に弊害を生み出す可能性も否定できないが，これを開発したり利用したりしている関係者が，この技術をどのように理解しているのかは必ずしも明らかではない．本稿では，生殖技術の関係者（研究者，医療者，当事者）が生殖技術のヒトへの応用をどのように理解しているか，その理解の中で科学知識がどのような役割を担っているかを明らかにすることを目指す．このような研究は社会学以外の多くの研究分野で行われているものの，現在のところ統一的な枠組みはない状況にある．そこで，本稿ではこれまでの先行研究を包括しつつ，本稿の問題関心である関係者の理解における科学知識の働きについても検討を行える「科学の公衆理解（PUS）研究」の枠組みと，近年PUS研究で精緻化されつつある「欠如モデル（科学者から無知な素人へ知識が伝播するモデル）」，「文脈モデル（科学知識が用いられる際の文脈を重視するモデル）」，「ローカルノレッジ・モデル（知識の局所性を強調するモデル）」に依拠して分析を試みる．なお，この課題に取り組むにあたって，本稿ではあえて「理解」することへの定義を明確に定めず，仮説作成的な質的研究法を採用して，生殖技術に関する関係者の様々な理解を幅広く検討することとした．これは，PUS研究が目指す「理解」するという行動の内容が多義的であることに由来する．

〔調査と分析〕調査は個別の聞き取り（３０分から２時間程度）を行った．協力者は生物学系研究者８名，医療者４６名，当事者２１名である．なお，医療者は職種別に医師１３名，看護師１７名，胚培養士１６名の構成

である．質的研究の基本的な分析手順を軸に，グラウンデッド・セオリーにもとづく分析を行った．

〔結果と考察〕研究者の理解を分析すると，【科学で把握しきれない人体】と【人体に影響のある生殖技術】という２つの大きな概念が抽出された．この２つの概念の関係から，研究者は生殖技術によって人体が容易に変化してしまうと考えていることがわかった．その際，研究者の理解においては，ヒトの「遺伝子」レベルの問題が重要であり，研究者の全てが自分の主張の根拠として，「遺伝子」の働きを持ち出しながら生殖技術に関する意見を述べていたことから，「遺伝子」は研究者にとって未知の部分が多い対象であることもわかった．研究者にとって，人間の身体の根幹をなす「遺伝子」はいまだ未知に溢れる曖昧な対象である．そして，生殖に関与する身体を始めとした生殖技術の様々な知識も，彼らにすれば決して確定した不動の知識ではなく，今まさに科学の最先端で作成過程にあるものとして受けとめられていることが明らかになった．さらに，【有用だが悪用される生殖技術】と【利用には100%の安全確保が必要】という概念も抽出され，研究者の多くは生殖技術の応用には，十分な基礎研究が積まれたかどうかという点を重視していることもわかった．しかし，実際には，このような学術的な確認作業がないままに生殖技術は社会に普及してしまったという理解が研究者には見られた．研究者における以上のような生殖技術の理解は，科学知識や科学的な理解の仕方で説明され，論理的かつ首尾一貫しているのが特徴である．

医療者の理解のなかで重要なのは,彼らが生殖技術には許容範囲のリスクがあると考えているにもかかわらず，彼らの職業的背景（属性）によって，その理解の根拠となる生殖技術に関する科学知識の使い方が異なるという点である．これは医療者が生殖技術の安全性／危険性をどう理解しているかを分析したなかで明らかとなった．その結果，生殖技術の安全性について明確な判断を示す談話は，職種別に見ると胚培養士（安全性を低く見積もる）と看護師（安全性を高く見積もる）に比較的多く，経験年数が2年未満の者と50才代の者（いずれも安全性を高く見積もる）にも多いことがわかった．これらの談話では，統計データなどの科学知識が多用され，自身のこれまでの経験は，統計データや科学知識を支える方向に使われる．ここでは医療者の談話は専門家的談話の類型を示している．これに対し，経験年数が3〜10年の中堅に多い，生殖技術の安全性について明確な判断を保留する談話では，統計データなどの科学知識は用いられるが，それらの専門的な知識の妥当性や，それが素人にどう理解されるかが考慮されていた．また．これらの談話では自身の経験は統計，科学知識を見直す方向に使われるといった特徴もあり，素人の立場に立った視点で生殖技術の理解が行われていることが示唆される．このような知見は医療者の理解が，科学知識を用いた統一的で揺るぎないものではなく，彼らの背景や，理解が提示される文脈の影響を免れないことを示している．

また，医療者による生殖技術の理解には，【未知の機能を持つ人体】と【自然と繋がり合う生殖技術】という概念が含まれており，これらが【生殖技術による影響を打ち消す人体の緩衝力】という概念につながっていた．これが，医療者の理解における最大の特徴である【肯定される生殖技術の未知】という概念を支えることが明らかになった．医療者においては，生殖技術に関する未知は排除されるべきものではなく，むしろ，これがなければ生殖技術を利用することができないとみなされているように思われる．医療者がこのような理解を持つ理由として，医療者の口からは日々の医療現場での経験があげられていたが，これを根拠として生殖技術の科学的な理解を述べることは明らかに困難である．その結果，医療者は生殖技術に関する未知をブラックボックスの中に入れた教科書的な「既存の」科学知識を多用するようになり，医療者の理解を背後で実際に支えている，経験主義的な科学理解の多くが，その言説から捨象されてしまう傾向が見られた．

当事者の理解で最も重要なのは，自分の身体から生じる感覚や生殖に関する社会的価値観などが混じり合った【自分の身体】と，【生殖技術に関する既成の科学知識】の間に生じる齟齬である．当事者の中には高度な科学知識を駆使しながら生殖技術の理解を口にする者がいる一方で，科学的な説明と自分の身体の状態とが合致しないことを怖れ，あえて生殖技術に関する専門的な科学知識を学ぶ事を避ける者も存在した．当事者の多くは，自分の身体から生まれた理解を科学知識に何らかの形で折り合いをつけ，両者間の齟齬を沈静化させようと試みることがわかった．

多くの当事者が生殖技術に関する科学知識と自分の身体感覚の齟齬に苦しむ中で，生殖技術を商品化されたサービスとして受容し，その機能的欠陥を商品の不良品のように考える当事者も存在した．消費者型のこうした新しいタイプの当事者は，生殖技術の普及についてより積極的な立場をとり，消費者各人の選択権を擁護するが，しかし，同時に一定の規制を前提にしていることもわかった．

本稿で得られた成果をまとめると，今後検証されるべき以下のような構図を描くことが可能である．科学者は生殖技術に関する理解を作成過程とみなすが，医療者，当事者というように科学の最先端から距離が開くにつれて，科学知識は教科書的な既成のものとして扱われる傾向にある．これはLatour (1987=1999)の知見に一致する．しかし，医療者が現行の生殖技術に関する科学知識を教科書的な既成のものとして扱うのは，個々の医療者が現場で得た独自の経験が重なり，医療者集団の中で生殖技術の未知が肯定されることに起因している．このような医療者集団独自の経験が彼らの扱う科学知識の「既成化」を促したと考えられるが，この「既成化」の裏で，個々の医療者独自の経験などは捨象されてしまう傾向にある．これは科学的言説と経験主義的な言説が現代社会では背反するものとみなされる傾向にあるからである．

医療者が用いた既成の科学知識は当事者へ受け渡される．しかし，当事者はこの科学知識が自分の身体と合致しないという事態にしばしば直面し，そのたびに躊躇いや混乱を経験する．そして，当事者の多くは科学知識と合致しない自分の身体を科学知識に一致させようと努力する．これは当事者にとって自分の身体よりも既成の科学知識の方が力を持っていることを意味する．

本稿では，関係者および関係者集団の理解は科学知識だけに依拠しておらず，それぞれの背景や経験から影響を受けたローカルノレッジであることを明らかにした．ただし，関係者の理解のうち，関係者の立場や経験，身体感覚から生じた言語化されにくい理解は捨象される傾向にある．その代わりに，生殖技術に関する教科書的でブラックボックス化した既成の科学知識だけが勢力を増し，その結果，これが関係者の間へ普及していくという事態も明らかになった．今後，生殖技術に関するブラックボックス化した科学知識しか持たない関係者が増えていく可能性が示唆されるが，ブラックボックス化した知識に支えられた生殖技術は人間の手で制御可能な道具として見なされるようになるため，その危険性を低く見積もられる可能性があると考えられる．

論文審査の結果の要旨

申請者、竹田恵子の課程博士学位申請論文『生殖技術の知識をめぐる文化社会学的研究—研究者・医療者・当事者への質的調査から』は、現在多くの先進工業国において広範囲に利用されている生殖補助技術(assisted reproductive technology, ART)について、その利用に関わるリスクや性質について、研究者、医療者、当事者の理解や意識をインタビュー調査から明らかにしようとするものである。

生殖補助技術については、周知のように、近年、その利用の限界やリスクの倫理的で社会的な問題について国内外で多くの議論が行われており、議論は医療社会学、科学技術論、フェミニズム社会学から家族社会学や法学にまで及んでいる。しかしながら、我が国における生殖補助技術の利用実態は自由診療とプライヴァシー保護のために明らかではなく、その実施は研究者による技術の開発、医療者と当事者によるその利用にゆだねられているのが現状である。本研究は、この技術の動向にもっとも重要な影響を及ぼすであろう、研究者・医療者・当事者の三者に焦点をあて、彼らが生殖補助技術をどのように理解し、位置づけているのかを明らかにするものである。

申請者は、第１章において、生殖補助技術に関する膨大な先行研究について医学、看護学、人類学、女性学、法学、生命倫理学、社会学の文献を渉猟し、これらを欠如モデル、文脈モデル、局所知識モデルの三つのタイプとして整理し、自身の理論モデルを局所知識モデルとして位置づけている。第２章においては、生殖補助技術の歴史的発展について十分に詳細な論述を行い、第３章から第９章において、研究者、医療者、当事者のそれぞれの生殖補助技術とその利用についての理解のあり方を詳細に跡づけている。調査対象者は、研究者８名、医療者46名、当事者21名と質的調査には十分な数を確保し、また、それぞれの調査対象者の選定にあたっても、職種や領域に偏りがないように周到な注意が払われている。また、分析手法についてもグラウンデド・セオリーを基礎として、調査者の先入見を極力排除するための周到な分析方法がとられている。

申請者は、調査の分析を通して、従来は提供者側として一括されていた研究者と医療者の間に技術の理解について深いギャップが存在することを明らかにし、また、同じ医療者においても職種によって、あるいは経験年数によってその理解や説明の仕方は微妙に異なることにも注目している。特に医療者において、その発言にさまざまな社会的な文脈が影響していることを指摘した点は、注目に値する発見と思われる。この点は、ベンチ（研究

室）とベッド（臨床）の間で何が起こるのかに注目している近年の科学技術論の流れの中で重要なテーマであり、申請者の研究が今後多くの議論を呼ぶことが予想される。申請者は、生殖補助技術が現在生成過程の技術であり、その安全性や性質の理解については研究者の間でも不十分であるという認識が存在する一方、医療者や当事者側にはその利用に由来する様々な経験知や理解が形成され、技術をとりまく複合的な状況が存在することを十分説得的に示しており、この問題についての国内におけるもっとも重要な研究の一つとなるものと考える。

申請者は、すでに本研究に関わる論考を国内の査読付き学術雑誌や学会において発表しており、科学技術社会論学会の奨励賞も獲得している。欧文文献についても十分なサーベイを行っており、語学能力についても問題なしとする。以上から、本論文は博士［人間科学］の学位授与にふさわしい業績と判定する。